

平成20年10月28日

「きのくに共育コミュニティと本県生涯学習の推進について」

- ・無関心な保護者も増えている中でどのように人を集めていくのか
- ・30市町村でフォーラムを実施予定。そこには保護者、学校の先生、青少年関係団体、NPO、行政、等できるだけ多くの方に声をかけ、関係をつないでいてもらいたいと考えている。既に開かれたフォーラムの中で、そのような問題提起が起こり、無関心な保護者を私達の輪の中に取り入れていこう、という話が起こっていた。そういう動きが起こることが始まりである。
- ・ボランティア活動の中に子どもたちも巻き込んで、共に取り組むことが必要。
- ・昨年、地域の民生委員とPTAが会合を持ったが、地域の中にある各種団体（子どもを育てる会、婦人団体等）がお互いにあまり知らず、うまく結びついていないことがわかった。
しかし「共育コミュニティ」の対象校となったおかげで、地域の人が子どもたちをよく見てくれていて、体育祭では一部の大変元気な子どもたちを批判的に見るのではなく、「よく頑張ってたな」と声かけをしてくれた。昨年度の社会教育委員会議でよい提言してもらったと感じている。

「家庭・学校・地域が連携した読書文化の振興方策について」

- ・学力と読書は非常に関連しているので、できる範囲で図書費の予算をつけてほしい。
- ・子どもが生まれた時に、本をプレゼントする自治体があるらしい。和歌山県もそのような取組ができたらしい。
- ・10年前に「子どもセンター」という子どもの居場所を作り、小さい頃から本に親しむ環境作りをした。教育は環境である。よい環境、望ましい環境を作ることが大事。また、これらの施策を行っていくには、核になる職員が教育委員会にいるということが前提条件になる。
- ・地域をあげての過去の取組、知恵、経験から学び、今後の「共育コミュニティ」に取り入れていく必要がある。つまり、子どもたちに読書意欲を喚起していくような環境を、社会教育の場でどう構築していくかがテーマである。
- ・高校生よみかたりボランティアの養成講座に来ている高校生が、読み聞かせを通して、育っている。これはこの講座が継続しているおかげだと思ふ。ぜひ広げていって欲しい。

平成21年2月10日

分科会1「きのくに共育コミュニティと本県生涯学習の推進について」

- ・フォーラムをすることの大切さを実感した。会が終わっても地域の人が帰らないので、話してみると、「この話し合いはおもしろかったから何回か続けよう」という声があがった。
- ・学校の課題をまず出してもらい、学校や地域ができることを検討していかなければならない。その際、学校は「実は」という部分を積極的に出してもらわないと、共育コミュニティが実現していかず、地域としても関与していけない。
- ・コーディネーターとして、もっと地域に入っていけるリーダーを発掘、育成していかなければならない。
- ・大人たちの方から多くを与えすぎない。子どもたちにどんな力をつけさせるのか、を押しさえて共育コミュニティの質の向上を目指さないと、本当に期待する効果は得られない。
- ・共育コミュニティやフォーラムの情報をもっと発信すべき。
- ・十分大人になっていない、社会性を身に付けていない大人（保護者）に育てられる子どもをどう支援していくか、を考える必要がある。
- ・共育コミュニティは、新たなものを作り出すというより、今までしてきたことを検証し、再評価するものと再構築していくものを見直すチャンスととらえるべき。
- ・公民館や社会教育施設の職員も含めて学校と地域をつないでいくコーディネーターとしての役割がある。そしてコーディネーターが学んでいく仕掛け作りが必要。

分科会2「和歌山県子ども読書活動推進計画」（案）に対する意見

- ・ブックスタートについての書きぶり
本に親しむ環境づくりの方法として、お母さんにその環境を与えるという大切な役割を市町村が担っている、と書く。
- ・公民館の記載についての指摘。
- ・読書活動を推進できる司書の研修についての記載。

全体会「和歌山県子ども読書活動推進計画」（案）に対する意見

- ・「啓発・広報等の推進」について本の紹介に終わるのではなく、「啓発」としては読書の楽しさを感じられる場の提供も必要。
- ・学校教育に関して、本を読まざるを得ない環境づくり等、学校の工夫を促す記述を盛り

込んで欲しい。

- 「共育コミュニティ」との連動や関係について、もう少し積極的に盛り込むべき。
- すべての取組分野において「共育コミュニティ」を基礎にすえて取り組んでほしい。

平成21年6月2日

「社会教育関係主要事業一覧及び社会教育関係団体補助金」について質疑

「和歌山県子ども読書活動推進計画」についてこれからの具体的な取組について

- ・学校図書室においては施設の充実が必要。
- ・「きのくに共育コミュニティ」の取組として学校ボランティアが環境整備をし、環境作りをすることが大切。
- ・読書活動を進めるためのキャッチフレーズを考えてはどうか。
- ・家庭で本を読む機会を作っていくようなアピールをする。
- ・図書室の環境整備に子どもたちも巻き込んでいく。
- ・まずお母さんたちが絵本を読んだり、絵本を紹介してもらえる集いがあればよい。

「共育コミュニティ」の今後について

- ・取り組んだことにより、学校が活性化することや子どもたちが地域で育てられている、ということを実感している。
- ・次に大切なのは、コーディネーター、管理職、現場の先生方がどう関わり、キーパーソンになっていくか、である。

平成21年11月11日

「共育コミュニティ」について

- ・学校ができること、できないこと、しなければならないことの仕分けがきちんとできているのか。学校の教員とPTAがともに考える機会が少ない。
- ・学校現場としては共育コミュニティに取り組んだことにより、地域との連携のあり方が具体的に見えてきた。
- ・取り組んでいる学校以外では知られていないことが多い。もっと県内に知らせていくことが大切。
- ・学校がやっている取組や悩みを地域や家庭に知らせていくことで敷居を低くすることが大切。
- ・近畿の公民館大会で発信していく。

「家庭、学校、地域における読書文化の振興」について

- ・「子ども読書活動推進計画」を活用し、また、県立図書館の出張講座を活用しながら、「おはなし子どもまつり」に取り組んだ。
- ・子どもたちの読書活動や読書文化を振興していくには、高校生の読み語りボランティアのような活動が大事。
- ・家庭の中で子どもの目の届くところに本がある、というところから読書が始まる。
- ・公的図書館がもっと変わっていかなければならない。大人の読書も進めていかなければならない。
- ・本を読むことが普通のことになるような本を読む環境を作る仕掛けをしていくことが、公的な立場の責務。
- ・開かれた図書館作りの具体例をあげての提案

キャッチフレーズの提案

- ・「大切な人に本をプレゼントしませんか」
- ・「テレビのスイッチを切る勇気を」
- ・「我が家のスイッチオフタイム」

平成22年2月17日

「家庭、学校、地域が連携した読書文化の振興方策について」

- ・今後の取組3点。
 1. 教育広報ラジオ「定期便 教育の窓」で読書活動推進の必要性を伝える
 2. 教育広報紙「きこら」で広報（キャッチフレーズや2年間の取組）
 3. 県で提供するテレビ番組でキャッチフレーズを流す

- ・学校での図書ボランティア10年目で、ようやく図書館便りに取り上げられ、学校から家庭に発信してもらえた。
- ・市町村に「和歌山県子ども読書活動推進計画」が改定されたことを伝えていく必要がある。
- ・県から「国民読書年」のPR活動をしてはどうか。

グループ協議題（3グループに分かれて協議）

1. 保護者、子どもに社会教育委員として呼びかけたいこと
2. 紹介したい取組事例
3. キャッチフレーズ

平成22年6月2日

「社会教育関係主要事業一覧及び社会教育関係団体補助金」について質疑

「家庭、学校、地域が連携した読書文化の振興方策について」

- ・各図書館の司書の研修が必要。
- ・県立図書館では様々な研修を実施、実施予定。

「きのくに共育コミュニティと本県生涯学習の推進について」

- ・教育支援事務所の役割が大きく期待されていると同時に、市町村の社会教育関係職員の力量形成、学校の先生方への社会教育への周知を進めていくことが大切。
- ・学校現場（教員）、コーディネーターに全体像を説明するような研修が必要。
- ・子どもに市民性をつけて、豊かな人生を送っていくという共通の意識を学校も地域も家庭も持つことが大切。
- ・子どもたちをお客さんのように扱うのではなく、子どもたちの活動を待ってあげる大人の姿勢がなければ、子どもたちの生きる力に繋がっていかない。
- ・支援学校の中にも共育コミュニティを作っていただき、地域の支援が活発になって欲しい。
- ・この社会教育委員会議での議論については、持ち帰っていただき、それぞれの立場で具体的に動いていただければと思う。また、事務局は委員からの意見を真摯に受け止め、次の取組に生かしていただきたい。